

平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究状況報告書

◆ 記入に当たっては、「平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究状況報告書記入要領」を参照してください。

ローマ字	SEO TATSUHIKO					
①研究代表者氏名	妹尾 達彦		②所属研究機関・部局・職	中央大学・文学部・教授		
③研究課題名	和文	歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題				
	英文	The Urban Environmental Management in the East Asia from the Point of Historical Analysis				
④研究経費	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	総合計
18年度以降は内約額 金額単位：千円	24,600	15,900	13,700	14,300	14,100	82,600
⑤研究組織（研究代表者及び研究分担者） *平成18年3月31日現在						
氏名	所属研究機関・部局・職	現在の専門	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）			
妹尾 達彦	中央大学・文学部・教授	中国都市史	研究総括・中国華北の都市と生態環境史、東アジア比較史			
新免 康	中央大学・文学部・教授	新疆ウイグル史	新疆ウイグル自治区の都市・環境史			
前川 要	中央大学・文学部・教授	東北アジア史	東北アジア・環日本海の都市・環境史			
新宮 学	山形大学・人文学部・教授	中国都市史	中国沿海部の都市・環境史			
田中 俊明	滋賀県立大学・人間文化学部・教授	朝鮮史	朝鮮の都市・環境史			
橋本 義則	山口大学・人文学部・教授	日本史	日本の都市・環境史			
⑥当初の研究目的（交付申請書に記載した研究目的を簡潔に記入してください。）						
<p>研究目的と意義</p> <p>現代の地球をつつむ問題群の中で、人類の急速な都市化の進展がもたらす都市問題と、地球環境の変貌から生じる環境問題は、われわれ人類が直面している最も大きな問題群をなしている。とくに、今日、世界最大の人口規模と巨大な経済力を備えた東アジアの直面する都市・環境問題は、地球全体の未来を左右する重みをもっている。</p> <p>本研究の目的と意義は、東アジアの都市と生態環境の相関関係の歴史の変遷を分析することで、現在の地球が直面する都市問題と環境問題を、歴史的背景にさかのぼって明らかにすることである。空間的には、中国大陸を中核とする東アジアを対象に、時間的には、東アジアに都市文明が誕生した紀元前15世紀から、21世紀の現在に至る長い時間帯の中で、都市・環境問題を分析する。本研究によって、現状分析に重きをおいた従来の都市・環境問題への視点でぬけ落ちていた、都市・環境問題の淵源と、両者の密接な関わり合いの経過を、人類の長い歴史の中で、初めて体系的に明らかにしてゆきたいと考えている。</p> <p>当該研究から期待される成果</p> <p>限られた5年間の研究期間の中で最大の成果を挙げるために、本研究では、東アジアの歴代の都城の生態環境の変遷の問題を中心に分析する。東アジアの各時期と各地域の特色を集約する都城を分析の中心におくことによって、東アジア各地域の都市と生態環境の比較分析が容易となり、今日の近代国家の首都がかかえる都市・環境問題に関しても、歴史分析をふまえた、より具体的な提言ができると思われるからである。</p> <p>本研究により、(1)現地調査にもとづく、東アジアの都市と環境の歴史に関する情報を集大成して公刊し、(2)都市環境の歴史を復元する図の作製とデータベースを作成し、(3)関係文献目録と研究史を整理・公刊して、都市と環境の歴史的相関性を解明したい。</p>						

⑦これまでの研究経過（研究の進捗状況について、必要に応じて図表等を用いながら、具体的に記入してください。）

平成16年度・17年度の2年間の研究は、次の3つの段階をふみながら進めてきた。

- (1) 東アジアの重要都市遺址の調査・情報収集
- (2) 海外共同研究者の招へいとシンポジウム・研究会の開催
- (3) 研究成果の公刊

その結果、東アジアの都市と環境の歴史に関して、豊富な研究情報の蓄積と、従来にない体系的な見通しが得られるようになってきた。以下、順次、述べていきたい。

(1) 東アジアの重要都市遺址の調査・情報収集

この2年間で、中国北京・南京調査（2004年8月）、韓国百済都城址調査（同年9月）、日本奈良平城京・藤原京遺址調査（2005年3月）、中国西安・洛陽都城址調査（同年3月）、中国東北・朝鮮半島都城址調査（同年4月）、中国北京・南京・中都の都城址調査（同年8月）、中国東北・渤海都城址調査（同年9月）、ベトナム都城址調査（同年11月）、韓国新羅都城址調査（2006年3月）を実施した。東アジアの大都市の相当箇所を精力的に調査し、東アジアの都市史と環境史についての新知見を多く得た。

本研究の目的を達成するために、対象とする都市ごとに6つのチームを形成して各研究者の責任を明確化し、各チームが競合しながら成果を挙げる体制をつくった。研究組織は、以下の6チーム構成となる。(A)中国大陸内陸部の都市と環境史（長安・洛陽等）。責任者・妹尾達彦（中国都市史）。(B)中国大陸沿海部の都市と環境史（北京・南京等）。責任者・新宮学（中国都市史）。(C)新疆ウイグル自治区の都市と環境史（カシュガル等）。責任者・新免康（中央アジア・新疆都市史）。(D)東北アジア・環日本海の都市と環境史。責任者・前川要（アジア考古学）。(E)朝鮮半島の都市と環境史。責任者・田中俊明（朝鮮都市史）。(F)日本の都市と環境史。責任者・橋本義則（日本都市史）。以上のチームはすべて、日本の研究者が責任者となり、海外共同研究者が、専門に応じて加わる。各チームの研究の推進と連絡については、研究代表者の妹尾達彦が全責任を負う。以上の各チームが、競合して多く新しい情報を獲得した。

(2) 海外共同研究者の招へいとシンポジウム・研究会の開催

この2年間に、ほとんどの海外共同研究者を日本に招へいし研究交流を行い、国際シンポジウムを5回、研究会を20回近く開催して、研究成果の公開と情報交換を行った。そのうち、2005年3月には、出席者が200名を越す2日間にわたる大きな国際会議を、東京で開催した。その成果は、『都市と環境の歴史学』第2集、全563頁の特集として公刊している。

また、東アジアの各地域の研究機関において、次のように、研究交流のシンポジウム・座談会を開き、東アジアの都市史と環境史についての研究成果の交換をはかってきた。すなわち、①2004年3月、中国・西安、②2005年5月、中国・北京大学、③同年6月、韓国・忠北大学校、④同年11月、ベトナム・社会科学院等である。

(3) 研究成果の公刊

海外調査やシンポジウム・研究会の成果は、本研究組織の学術誌『都市と環境の歴史学』（2006年3月～）に順次掲載している。すでに、60篇近い研究論著を内外で公刊して、批判をおおぎながら研究を進めている。

総じて、本研究は、順調に所期の成果をあげており、研究計画年度内の集大成にむけて、着実に進んでいると思われる。

⑧特記事項（これまでの研究において得られた、独創性・新規性を格段に発展させる結果あるいは可能性、新たな知見、学問的・学術的なインパクト等特記すべき事項があれば記入してください。）

本研究の独創性・新規性

これまでの研究で得られた本研究の独創性は、以下の2点に大別できる。

(1) 研究方法としての都市・環境問題と歴史学の結合

都市問題と環境問題に関する共同研究の大半が、現在の都市問題・環境問題をあつかっているために、歴史的考察が弱く、今日の環境問題の要因を深い視点から照射することが困難な状況が続いてきた。また、都市問題と環境問題が個別に分析される傾向にあり、両者を相関させて統一的に分析して問題点を明確にする視角に乏しい。新疆から日本に至る東アジアの諸都市を比較して分析する試みも、従来なされてこなかった。本研究は、現在の研究の隘路を打破し、人類の直面する都市と環境の問題を、東アジアの歴史的背景から包括的に分析する点に独創性がある。

都市・環境問題と歴史学を結合するためには、さまざまな分野の研究者の協力が不可欠である。本研究組織は、歴史文献学の研究者を中核に、歴史地理学・考古学・歴史生態学・都市学等の各分野の研究者が集い、国内外の各地域において共同で調査を行い、シンポジウムを開催して討論することで、従来にない、都市・環境問題と歴史学の結合が可能になった。

海外の中核研究機関となった6つ機関、すなわち、(a) 中国の北京大学中国古代史研究センター、(b) 北京大学都市・環境学系、(c) 陝西師範大学西北歴史環境経済社会発展研究センター、(d) 韓国ソウル大学、(e) 台湾中央研究院、(f) ケンブリッジ大学には、都市と環境の歴史に従事する俊英が多数集っており、これらの研究機関と日本の研究機関とが密接な関係を保ち、互いに研究蓄積を最大限に活用することができたことが、本研究の順調な進展を支えている。

前近代の東アジア史の分野において、都市史と環境史を結合するテーマで、これだけの規模の国際共同研究がなされたことは初めてのことであり、研究分析方法と共同研究の組織法の両面において、画期的な成果をあげつつあると確信している。

(2) 新たな学問視角の創造—都市史と環境史の構造

従来別々に論じられてきた、都市史と環境史を一つに統合する視角をもって、現地調査で新しい情報を獲得し、各種のシンポジウムで専門を異にする研究者が討論を重ねることによって、東アジアの都市史と環境史の大きな見取り図が描けるようになってきた。すなわち、アフロ・ユーラシア大陸における都市史と環境史の密接な関連である。現時点では、まだ模索中ではあるが、以下、簡単に述べてみたい。

生態環境の境域にあたる農業地域と遊牧地域の交界地帯に沿った都市網は、前近代の都市文化の粋を集める地域であり、地球環境の変化に最も敏感に反応する場所でもあった。この農業-遊牧交界地帯の都市網から、沿海地帯の都市網に交通幹線が移動することが、アフロ・ユーラシア大陸の近代化の道筋であり、都市と環境の関係が転換する契機となる。この農業-遊牧交界地帯から沿海地帯の都市網への転換、すなわち、陸路から海路の都市網への転換は、都市と環境の歴史に劇的な転換をもたらし、人類の歴史を構造的に変革して現在にいたっている。

アフロ・ユーラシア大陸の交通軸線の陸路から海路への移行は、自然から脱する人間の主体化を推し進め、従来になかった都市問題と環境問題をうみだしていくのである。東アジアの各地域の都市は、この交通幹線と人間認識の転換の大きな渦の中に投げ込まれて、現在に至っている。

農業-遊牧交界地帯から沿海地帯の都市網への転換のもつ人類史的意義に注目することで、都市史と環境史の研究を結合する、新しい研究視角を得ることができる、と考えている。同時に、現在の都市問題と環境問題が生まれていく歴史的背景もより明瞭となり、今後の対処法にヒントを与えてくれると思う。

⑨研究成果の発表状況 (この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文(掲載が確定しているものを含む。)の全著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。)

○妹尾 達彦(編)『都市と環境の歴史学』第1集、日本学術振興会科学研究費基盤研究(S)「歴史学的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題」研究成果報告書、1-507頁、2006年

○妹尾 達彦(編)『都市と環境の歴史学』第2集、同上、1-563頁、2006年

○妹尾 達彦(編)『都市と環境の歴史学』第3集、同上、1-304頁、2006年

妹尾 達彦「農業-遊牧境界地帯与隋唐長安城」(『中國史研究』(韓国中國史学会)40巻、105-130頁、2006年)

妹尾 達彦「中国の都城とアジア世界」(『シリーズ都市・建築・歴史1 記念的建造物の成立』東京大学出版社、139-210頁、2006年)

妹尾 達彦「九世紀的転型-以白居易為例-」(『唐研究』(北京大学出版社)13号、493-532頁、2005年)

妹尾 達彦「固有なのか、普遍なのか?-隋唐長安城の建築構造と社会構造-」(『年報都市史研究』(山川出版社)13号、9-26頁、2005年)

妹尾 達彦「唐代長安の都市生活と墓域」(『東アジアの古代文化』123号、51-60頁、2005年)

妹尾 達彦「八世紀前半葉的長安」(『中日文化交流研討会論文集』(中国人民日報社)65-74頁、2005年7月)

妹尾 達彦「長安への旅」(『NHKスペシャル 新シルクロード5 カシュガル・西安』(東京・NHK出版社)200-215頁、2005年)

妹尾 達彦「隋唐」(『中国史研究入門』(名古屋大学出版社)100-126頁、2005年)

妹尾 達彦「前近代中国王都論」(『アジアの社会と国家 中央大学人文科学研究所研究叢書37』、183-227頁、2005年)

妹尾 達彦「唐長安史研究と韋述『兩京新記』」(『渤海都城の考古学』東京・東洋文庫、1-35頁、2005年)

妹尾 達彦「世界都市長安における西域人の暮らし」(『シルクロード学研究叢書』奈良：シルクロード研究センター、21-99頁、2005年)

妹尾 達彦(編)『隋唐長安城関係論著目録稿 1911~2005年』(中央大学文学部東洋史学研究室、1-66頁、2005年)

妹尾 達彦(編)『東アジアの都市史と環境史-新しい世界へ-』(中央大学文学部東洋史学研究室、1-406頁、2005年)

※印刷中の論著

妹尾 達彦「都市的文化与生活」(『魏晉南北朝隋唐史的基本問題』(北京・中華書局、印刷中、2006年)

妹尾 達彦「唐代長安城的儀礼空間」(『海外中国研究叢書 礼治与政教』(南京・江蘇人民出版社、印刷中、2006年)

妹尾 達彦「長安と洛陽の内部構造」(『都市と農村』東京・朝倉書店、印刷中、2006年)

妹尾 達彦「宋代史研究の最前線に接して」(『宋代史研究会論文集』東京・汲古書院、印刷中、2006年)

妹尾 達彦「唐代長安的西市与絲綢之路」(『唐代長安西市研討会論文集』北京・中国社会科学出版社、印刷中、2006年)

妹尾 達彦『唐代長安の都市計画』(韓国語訳、ソウル・ゴールデンバフ社、印刷中、2006年)

妹尾 達彦「都の立地と変遷-中国大陸の事例-」(『人文科学研究所紀要2006年』東京・中央大学人文科学研究所、印刷中、2006年)

※国際会議・学会等講演

妹尾 達彦「從歴史的視角分析東亞城市問題与環境問題」中国西部大開發国際会議、陝西師範大学西北歴史環境与经济社会發展研究センター、2005年3月14日

妹尾 達彦「唐長安城的城内与城外」北京師範大学古代史研究講座、北京師範大学、2005年5月24日

妹尾 達彦「長安与全球史」清華大学八十周年講座、清華大学、2005年5月25日

妹尾 達彦「唐代長安的儀礼空間」中国社会科学院歴史研究所、2005年5月26日

妹尾 達彦「洛阳史新探」北京唐史学者シンポジウム、北京師範大学、2005年5月27日

妹尾 達彦「九世紀的轉換-以白居易為事例-」北京大学中国古代史研究センター、2005年5月30日

妹尾 達彦「農業-遊牧交界地帯和隋唐長安城的歴史」韓国中国史学会 第6回国際学術会議、忠北大学校、2005年6月10日

⑨研究成果の発表状況(続き) (この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文(掲載が確定しているものを含む。)の全著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。)

○新免 康 「中国新疆のウルムチ(烏魯木齊)市の歴史の変遷」(『都市と環境の歴史学』第2集、172-190頁、2006年)

○新免 康 「ウイグルトウルファンのイスラーム聖廟の歴史と現在」(末成道男・曾士才編『講座・世界の先住民族-ファースト・ピープルズの現在-』01 東アジア』, 明石書店, 2005年, 211-226頁)

○新免 康 「中国ムスリムの女性教育-1980年代以後の状況を中心に」(王建新との共著)(加藤博編『イスラーム地域研究叢書6:イスラームの性と文化』, 東京大学出版会, 2005年, 127-151頁)

新免 康 国際会議での報告

①"The history of Khwaja Muhammad Sharif: the appendix of Turki translation of Tarikh-i Rashidi" (Amanbek Djalilovとの共同報告), 《International Workshop on Xinjiang Historical Sources》, Dec.12, 2004, Matsuzakaya-honten, Hakone.

②"Buzurg Khan Tora and his Mazar at Katta Kenagas Village in Ferghana Valley", International Conference <<Mazars in Ferghana and Xinjiang>>, Nov. 27, 2005, Ogura Building, Tokyo.

○前川 要 「北の中世港湾都市:津軽十三湊遺跡-中心・周縁論からの再検討-」(『都市と環境の歴史学』第2集、172-190頁、2006年)

○前川 要 「中世近江における寺院集落の諸様相」(『日本考古学』第19号 51-72頁, 2005年)

○前川 要 "Movement in Mediaeval Far East Asia—people, material goods, technology—Vladivostok International Symposium," pp.1-276, 2005

前川要(酒井英男,岸田徹,伊藤孝と共著)「電磁気から考古学に迫る-遺跡探査と土壌の物性研究-」(『歴史読本』783号, 216-223頁, 2005年)

前川要(山口欧志と共著)「中世北東日本海域におけるモノ・人・情報の動き-サハリン白土城の考古学的調査から-」(『中央大学社会科学研究所年報』第9号・前川要_2004)

前川要(編著)『中世総合資料学の可能性-新しい学問体系の構築に向けて-』(新人物往来社, 1-231頁, 2004年)

前川 要 「日本列島における中世初期の都市形成-ロシア沿海州土城の発達史との比較検討から-」(『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会, 207-214頁, 2004年)

○田中 俊明 「高句麗長安城の築造と遷都」(『都市と環境の歴史学』第1集、376-396頁、2006年)

○田中 俊明 「朝鮮古代都城と中国都城」(『都市と環境の歴史学』第2集、427-447頁、2006年)

○田中 俊明 「高句麗の平壤遷都」(『朝鮮学報』190輯、21-60頁、2004年)

田中 俊明 「加耶諸国と倭の関係史」(日朝友好促進京都婦人会議編『日本と朝鮮の関係史』アジェンダ・プロジェクト、京都、41-69頁、2004年)

⑨研究成果の発表状況(続き) (この研究費による成果の発表に限り、学術誌等に発表した論文(掲載が確定しているものを含む。)の全著者名、論文名、学協会誌名、巻(号)、最初と最後のページ、発表年(西暦)、及び国際会議、学会等における発表状況について記入してください。なお、代表的な論文3件に○を、また研究代表者に下線を付してください。

- 田中 俊明「特輯『韓国出土文字資料へのアプローチ』にあたって」(『古代文化』56巻11号、1頁、2004年)
- 田中 俊明「広州船里出土文字瓦の解釈と意義」(『古代文化』56巻11号、39-52頁、2004年)
- 田中 俊明「『魏志』東夷伝の韓人と倭人」(武田幸男編『古代を考える 日本と朝鮮』吉川弘文館、10-36頁、2005年)
- 田中 俊明「朝鮮半島南部にいた「倭人」とは」(『週刊司馬遼太郎街道をゆく』6、朝日新聞社、12-13頁、2005年)
- 田中 俊明「『魏志』倭人伝を「東夷伝」全体から読み解く」(『歴史読本』51巻3号、78-85頁、2006年)
- 田中 俊明 国際会議での報告
- ① 韓国・高句麗研究財団主催 第1回国際学術会議「韓国史のなかの高句麗の位相」
発表題目「高句麗長安城の平面構造」於 ソウル・アンバサダーホテル 2004.9.16
 - ② 韓国・白山学会 発表題目「高句麗長安城の規模」於大田・国立中央科学館 2005.4.15
 - ③ 韓国・円光大学校馬韓百濟文化研究所主催 第17回馬韓百濟文化学術会議「古代都城と益山王宮城」発表題目「王宮城と高句麗長安城」於益山・円光大学校・昇山記念館 2005.5.26
- 新宮 学「近世中国における首都北京の成立」(『都市と環境の歴史学』第1集、484-485頁、2006年)
- 新宮 学「北京遷都研究の現状と課題」(『都市と環境の歴史学』第2集、146-168頁、2006年)
- 新宮 学「北京城と葬地—明王朝の場合」(『都市と環境の歴史学』第3集、82-111頁、2006年)
- 新宮 学「陳建『皇明資治通紀』の禁書とその続編出版(一)」(『山形大学歴史地理人類学論集』6、65-77頁、2005年)
- 新宮 学「近世中国における首都北京の成立」(シリーズ都市・建築・歴史5『近世都市の成立』東京・東京大学出版会、375-409頁、2005年)
- 新宮 学「陳建『皇明資治通紀』の禁書とその続編出版(二)」(『山形大学歴史地理人類学論集』7、111-138頁、2005年)
- 橋本 義則「日本の古代宮都—内裏の構造変遷と日本の古代権力—」(『シリーズ 都市・建築・歴史』1、東京大学出版会、15-84頁、2006年)
- 橋本 義則「日本の古代宮都と後宮」(『都市と環境の歴史学』第2集、508-541頁、2006年)
- 橋本 義則「日本の古代宮都と葬地-文献史料の整理とその基礎的検討を中心に-(上)」(『都市と環境の歴史学』第3集、167-235頁、2006年)
- 橋本 義則「銅の生産・消費の現場と木簡」(『文字と古代日本』3、吉川弘文館、249-278頁、2005年)